

聖書:列王記第二 6章18~23節

説教:打ち殺してはなりません

はじめに

エリシャは、今からおよそ二千八百年前、北イスラエルを中心に多くの働きをした預言者でした。困っている人たちを助け、死んだ子どもを生き返らせました。また、神学校の校長に迎えられて後進の指導をするかたわら、イスラエル王の顧問という役割も担っていたようです。そのことに関してですが、隣の国のアラムがイスラエルに攻めようとしたときのことです。エリシャがアラムの動きを事前に察知し、これをイスラエル王に知らせ、難を逃れます。情報が事前に漏れたことを知ったアラムの王は激怒し、大軍を送り込んでエリシャ殺害を企てます。ところが、エリシャの周りを火の馬と戦車を取り囲み、何の害も加えることができなかった。それが前回までのあらすじです。

その後、アラムの王が送った馬と戦車の軍はどうか。それが今日の話になります。アラム軍は牙を抜かれたライオンのようになり、サマリアに連れて行かれ、そこで殺されると思いきや、盛大な宴会を開かれて、何事もなくアラムに送り返されます。今ウクライナで行われている戦争で聞こえてくるのは、市民を無差別の攻撃したとか、拷問を加えられて多くの人が殺されたとか、そんな恐ろしい話ばかりです。それと比べるとエリシャの話はまるでおとぎ話にしか聞こえません。「エリシャは心優しい人だった。」そういうことを言おうとしているのでしょうか。いや、もっと私たちの救いに結びつく大切なことを教えようとしているのではないか。そのことをご一緒に考えてまいります。

1 目をくらまされた

1) 道がわからない

18, 19節。「アラム人がエリシャに向かって下って来たとき、彼は主に祈って言った。『どうか、この民を打って目をくらませてください。』そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って目をくらまされた。エリシャは彼らに言った。『こちらの道でもない。あちらの町でもない。わたしについて来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってあげよう。』」

「目をくらませる」とあるのは、これは兵士たちの周りが暗闇におおわれてしまい、どの方向に歩めばよいのかまったく見えなくなったと言うこと

でしょう。そんなことがあるのかと思うかもしれませんが、皆さんも自分のことを振り返ってみてください。目指すべき目標がはっきりわかり、そこへ進むべき道もはっきり見えていてなんの障害もなく順調に目標に到達できました。そんな人は誰もいないでしょう。あるとき、真つ暗闇に閉ざされてしまい道に迷うようなことがあったのではないかと。そう考えると、このアラムの兵士たちは、なにか私たちの姿を現しているような気がしてくるのです。

2) あなたの捜している人のところへ

エリシャはこう言います。「私について来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってあげよう。」

いったいエリシャは誰のところに連れて行こうとしていたのでしょうか。よく考えれば、エリシャは奇妙なことを言っています。というのは、アラムの兵士たちはエリシャを捜してやって来たのではないですか。そのエリシャは目の前に立っています。ところが、アラムの兵士たちが捜しているのはエリシャではなく別の人のような言い方をしているのです。ではいったいそれは誰のことだったのか。その先を見ていきましょう。

2 目を開く

1) サマリアの真ん中

20節。「彼らがサマリアに着くと、エリシャは言った。「主よ、この者たちの目を開いて、見えるようにしてください。」主が彼らの目を開き、彼らが見ると、なんと、自分たちはサマリアの真ん中に来ていた。」

サマリアは、北イスラエルの中心都市です。アラムの兵士にしてみれば敵の国のど真ん中に連れてこられたわけですから、それを知ったときは腰を抜かすほど驚いたでしょう。そんなアラムの捕虜たちを見て、イスラエル王は興奮しながらこんなふうに言います。「私が打ち殺しましょうか。私が打ち殺しましょうか。わが父よ。」

エリシャは、いやいやそんなことはしてはいけませんと言ってイスラエル王をいさめ、殺すのではなくてその反対に大きな宴会を開いて彼らをもてなし、そうしてからアラムに送り返しなさいと助言します。

2) 捜している人はだれだったのか

この意味についてはこの後で触れることにして、その前に「あなたがたの捜している人」とはいったい誰だったのか、考えてみましょう。この場面には限られた人しか出てきません。一人は北イスラエルの王。それははっきりしています。それからあえて言えば、兵士たちに食事を出した人たちが出てきますが、それはどうも違うでしょう。そうしますと、アラムの兵士たちが捜していたのは、イスラエルの王だったということでしょうか。でもそれはおかしい。彼らの任務はあくまでもエリシャを殺すことです。エリシャ以外の他の誰かを捜していたわけではありません。ますます謎が深まります。

3 罪からの救い

1) 主イエスを殺した

こんなときは視点を変えて考えてみると、見えてくることがあります。先ほども少し触れたことですが、この所を私たちのこととして読んでみるのです。目をくらまされて道に迷ってしまったアラムの兵士たちは、罪ある私たちの姿そのものではないか。そんなふうに見てみるのです。その兵士たちはエリシャを殺しに来ました。そのエリシャは周りの人たちからどのように呼ばれていたのでしょうか。6章9節に「神の人」とあります。10節と15節でも出てきます。それは「神のような人」、という意味ではなく、神から召し出された預言者、神の言葉を神に代わって取り次ぐ者。そのような意味です。もし神の人に刃向かい、殺そうとするなら、それは神に逆らうのとまったく変わらない。そうしますとアラムの兵士たちはなにをしようとしていたことになるか。アラムの王の命令によって、神に逆らおうとしていたことになりす。

アラムの兵士がそうであったのなら、では私たちは何をしようとしていたことになるのか。私たちは誰にも命令を受けませんでした。神から遣わされてきた神のひとり子であるイエス・キリストを十字架で殺そうとしていた。そのように結びつくのではないですか。こう言うと、反論する方がいます。「私たちはアラムの兵士たちのように武器は持っていないし、馬も戦車もない。神のひとり子を殺していません。」そうやってどこまでも、十字架につるされたイエス・キリストから流れ出た血の責任は私にはないと言い張ります。

でも聖書はこう言っているのです。第一ヨハネ1章8節。「もし自分には罪がないと言うなら、私た

ちは自分自身を欺いており、私たちのうちに真理はありません。」

かつて私はこう言っていた人間でした。「人には信仰の自由があるので、妻が何を信じようが自由です。けれども私はキリスト教は信じない。」私は公平で寛大である。そんな態度です。では心の中はどうだったのか。「自分には隠している罪がある」となんとなく感じてはいました。もちろん、そんなことは認めたくありませんから、「みんな同じようなことをしている」と言ってごまかし、真正面から見ようとしません。口では「私は真理を愛します」とか、「真理が大切です」と言いながら、いっぼうでは自分の中にある罪をごまかして、自分を欺いている。そんな人間に、真理があるわけがありません。罪と罪と認めず、暗闇の中に押し隠そうとする態度、そうやってますます真理から遠ざかる生き方、その生き方そのものが、実はイエス・キリストを十字架に追いやることだったので。暗闇の中でどこに道があるのかがわかりません。それでも突っ立っているわけにはいかないので、当てもなく出たとこ勝負の生き方を繰り返していたようなものだったので。

2) 打ち殺してはならない

そのような私たちに、神はどのようにされるのでしょうか。イスラエル王はいきり立って叫びました。「私が打ち殺しましょうか。私が打ち殺しましょうか。わが父よ。」しかしエリシャはそれをおしとどめながら、まったく思いがけないことを言います。「打ち殺してはなりません。あなたは、捕虜にした者を自分の剣と弓で打ち殺しますか。彼らにパンと水を与え、食べたり飲んだりさせて、彼らの主君のもとに行かせなさい。」

アラムの兵士たちは王の顧問であったエリシャを殺そうとしたのですからイスラエル王が「私が打ち殺しましょう」と言うのは当然のことです。それと同じように、私たちも神のひとり子を十字架につけて殺したのですから、父なる神の前に連れて行かれ、裁判となれば死刑は免れません。ところがエリシャは「打ち殺してはなりません」ときっぱりと言う。いや、そればかりではなく、「食べたり飲んだりさせて帰しなさい」とまで言う。

アラムの兵士たちがあまりにもかわいそうなので、情けを掛けてやったということでしょうか。今の時代は、戦争捕虜の取り扱いについて定めたジュネーブ条約というのがあり、捕虜に対しては人道的な待遇を与えなければならないと書かれて

いるそうです。エリシャはその精神を先取りして発揮したのだということでしょうか。

3) 主は食べたり飲ませてくださった

エリシャは言いました。「あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってあげよう。」いったい誰のところだったのでしょうか。もうおわかりでしょうか。エリシャは、罪ある私たちを殺すためではなく、その罪を赦してくださるイエス・キリストのところへ連れて行ったのではないですか。なぜそう言えるのですか。エリシャはこう言っているからです。「食べたり飲んだりさせて帰しなさい。」

このことばと主イエスが語ってくださったことばとを比べてください。ヨハネの福音書6章55、56節「わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物なのです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしもその人のうちにとどまります。」

私たちが暗闇の中をさまよひ、神のひとり子である方を十字架で殺してしまった私たちを、神はその罪を赦してくださったばかりではなく、ご自分の肉と血を分け与えて、食べさせ飲ませてくださいました。今わかります。この方こそ、私たちがずっと捜し続けていた方であった。自分の力で出会ったのではありません。この方のほうから私たちに近づいてくださり、暗闇を照らす光となってくださいました。光に導かれながら歩んでまいります。